
COWBOY BEBOP 『寄せ集めブルース』

紅い月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COWBOY BEBOP 『寄せ集めブルース』

【Nコード】

N0928G

【作者名】

紅い月

【あらすじ】

語られない物語。語られない過去。これはそれが集まった。そんな話

SESSION 18. 5# 『ロストデイズ・ロストメモリーズ』 TRACK 1

これは、mixyのCOWBOY BEBOPコミュニティにて掲載された多人数参加型リレー小説の（私なりの）改訂版になります。

SESSION 18. 5# 『ロストデイズ・ロストメモリーズ』 TRACK 1

通信機を介して相棒から連絡が入る。

「スパイク。首尾は？」

「乗らねえなあ…こんなの」

煙草をふかしながらスパイクはボヤク。

既に足下には数本の吸い殻が広がっている。

「まあ、頑張ってくれ。椎茸だけってのも飽きただろ？」

先日、食料が底を尽き、調達の際とある事件に巻き込まれで大量の椎茸を入手した。

食料危機自体は無くなったが、食卓が椎茸のみと言う偏り過ぎた物になってしまっていた。

ジェットも呆れた感じでエールを送るが、帰って来た答えはやはりやる気の無いものだった。

「聞き込みってのならおたくや、フェイにでもさせれば良いんだよ。大体、あの女はどこ行ったんだよ？」

煙草を足下に捨て、新しい物に火を点ける。

「なけなしの2000ウーロンを馬にプレゼントしに行ったよ」

スパイクは一息で半分近く吸い、投げ捨てた。

「まったく、俺達の食卓にプレゼントしようとは思わないのかね？」

歩き出そうとした所に後ろからいきなり声を掛けられた

「ちょっと！そのアナタ！どう言うつもりなの！？」

スパイクは振り返るとそこには長身の美女が腰に手を当ててこちらを睨んでいた。

「えーっと…」

「ここは、禁煙区間よ！今すぐ捨てた煙草を拾いなさい！」

スパイクは拾い

「おっと、失礼」

女は

「フンッ」と鼻を鳴らして去って行った。

「ジェット…」

女が去った後しばらくしてスパイクは通信機で相棒に最高の報告をした。

「見つけた」

「本当か！」

「ああ。画面で見るより」

「ん？」

「いい女だった…」

SESSION 18. 5# 『ロストデイズ・ロストメモリーズ』 TRACK 2

バン！バン！

スパイクがモニターの横を力いっぱい叩いている
モニターは砂嵐を垂れ流していた。

「……………」

ガンッ！

モニターの前に踵落としをかました。

一度画面がちらつき正常に戻る。

どこか古めかしい音楽と共にカウボーイスタイルの黒人男性と白人女性のコンビが現れた。

6

「アミーゴ！ 太陽系30万の賞金稼ぎの諸君元気かい！？」

「指名手配者情報をお伝えする『BIG・SHOT』の時間よ」

「さてさて、今日のトップバッターはコイツだ！」

画面に女の写真と個人情報が出る

「マリア・リー。彼女、元警官だったんだけど何を思ったのか逮捕したある組織のボスと一緒に逃亡。その後ボスが死体になっと見つかったんだ。しかも彼女、殺した奴の組織のボスになってるらしい

んだ。その組織も裏で色々ヤバいのに手を付けているらしいって話だ」

「まあ、怖い！でも、グッドニュースもあるのよ！」

「なんと、賞金が驚きの二千万ウーロンって事だ」

「条件はいつもの通り」

黒人の方がぐるぐる巻きに縛られ保安官とおぼしき男に拳銃を突きつけられ歩いている

「賞金首を生きたまま連れてくる事だ」

「殺したら、賞金はパアよ…」

夕日と絞首刑の様子をバックに女性が説明した。

「いつになくデカイ大物だ！頑張ってゲットしてくれ」

その様子をスパイクは欠伸をかみ殺しながら眺めていた

とある古びれた酒場。

客は三人の年寄りと一人の男。

彼らはここの常連で、常に三人一組で行動している。

男の方は店の一番奥で一人黙々と酒を飲んでいた。

三人はビールとつまみを食べながらポーカを楽しんでいた。

「まただ、お前らそうやって儂のことカモにしてるけど、今こうやっていられるのも儂がゲート掘ったおかげなんだぞっ!」 「お前は負けるといっつもそうだ。ゲートは儂等みんなで掘ったんじゃ」

「掘ったな。死に物狂いで掘ったな」

「ばっか野郎……」

更に悪態をつこうとした時に店の入り口が開いた。

入って来たのは一人の女。女はカクテルを頼むと真っ直ぐ一番奥の男の席に向かった。

「お待ちせ。待ったかしら?」

男は多少赤くなった顔で笑い

「いや、大丈夫だ。時間通りだよ、マリア。それより…」

「ええ。ごめんなさいね」

マリアと呼ばれた女は入り口……三人組の方を向いて答えた。

次の瞬間、扉、窓ガラスが吹き飛んだ。

「マリア・リー。見つけたぜ！」

入り口には数人の男達。それぞれ、手には拳銃などで武装していた。その中でショットガンを持っていた一番大きな男が一步前に出た。

「マリア・リー、観念しな。店は俺様の部下が固めてる。逃げ場なんざねえ」

全員の顔には圧倒的な戦力差から来る余裕の笑みを浮かべていた。

マリアは笑みを浮かべた。

そして、自分の前にあったテーブルを蹴り上げた。

リーダー格の男がショットガンを撃つがそれは貫通力がゼロに等しい散弾、テーブルを粉碎するに留まる。

マリアはその隙を付いて、懷から銃を抜き発砲。

「がっ！」

「げっ！」

「ぎっ！」

寸分違わず三人の手から銃を撃ち落とした。

「形勢逆転ね…」

銃口を向けながらゆっくりと立ち上がった。

「けっ、まだ外の奴らが残って……………」

続いて外から銃声と部下の悲鳴が続いた。

「くっ、クソがあ!!」

男達が立ち上がりマリアの方へ襲いかかる。

マリアは冷静に部下二人に銃弾を撃ち込み無力化した。

ボス格の男はその隙に自分の腕が届く範囲に入れていた。

（勝った!）

マリアの腕を捕ろうと手を伸ばしたが、空を切るのみであった。

しかも、目の前にいたはずのマリアが視界から消えていたのである。

次に聞こえたのは

ゴキッ!

自分の頸骨を粉碎された音を最後に男は意識を闇に落とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0928g/>

COWBOY BEBOP 『寄せ集めブルース』

2010年11月13日11時29分発行